

## 「聖霊の悲しみ」

エペソ人への手紙 4 : 30 - 32

July.14.2024

### エペソ人への手紙 4 : 30 - 32 (パウロ)

#### Preface

「神の聖霊を悲しませてはいけません」という意味深な言葉が出てきます。

エペソ書 4 : 29 に至るまで、「偽りではなく、互いにかからだの一部分として、隣人に真実を語ること」や、「人に対して憤ったままであってはならないこと」や、「盗んではいけないこと」、「ことばをもって人に恵みを与えること」など、他者との関係、人との関係にこそ、イエス・キリストを信じ生きることの具体性が表れるということを見て参りました。

今読みましたエペソ書 4 : 31 以降にも、「無慈悲、憤り、怒り、怒号、のしり、悪意などを捨て去ること」や、「互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい」という同じような、人と関係を築いていく上で大切な、キリストにある行いの実践について説き勧めて下さっています。

そして、29 節までの言葉と 31 節からの言葉を、サンドウィッチの具を挟む両サイドの美味しい食パンに例えるならば、そのサンドウィッチの何たるかを決める重要な肝となる具のような内容として、30 節に、「聖霊を悲しませてはいけません」という言葉が出てきます。

「神の聖霊を悲しませてはいけません。」

キリスト教信仰が、私たちの生活において具体的に表れる上で、この言葉の内容ほど重要なものはないかもしれません。

果たして、私たちがキリストを信じる者として生きて行く上で、その判断だったり、決定だったり、行いだったりの基準が、私という人でなく、聖霊なる神様が悲しんでおられることなのか、それとも喜んでおられることなのかということが、その基準になっているだろうかと思われるように感じます。

「果たして、僕の心の内には何があるのだろうか？ 聖霊が悲しむことよりも、僕が悲しいと思うことの方が悲しいと思っている。『僕が悲しい』ということが偶像になっていて、『聖霊が悲しんでおられる』という神の御声が聞こえていないのではないだろうか」と、私自身、この御言葉を前に思わされます。

#### Part One

「聖霊を悲しませてはいけません」というこの使徒パウロ先生の語り掛けに、皆さんはどのような思いを抱かれるのでしょうか？

心が痛んだり、震えるような思いがするのでしょうか。

それとも、「聖霊様を悲しませるようなことは、まあ、あんまりしていないんじゃないかなあ」というような思いでしょうか。

または、「う～ん、特に何も感じないなあ。そもそも、聖霊の感情や思いなんてものは、感じたことがないかもしれない」というような思いでしょうか。

ヨハネの福音書 6 : 6 3 で、イエス様が、

### ヨハネの福音書 6 : 6 3 (パワポ)

わたしがあなたがたに話してきたことばは、霊であり、またいのちです。

と仰っていますが、私たちが、聖霊の語り掛けや思いを覚えるために不可欠なのが、イエス様のお言葉、聖書の言葉です。

聖書を読み、聞き、食し、咀嚼し、肉と霊の栄養分として取り込み、また祈りの生活を通して、聖霊の語り掛けや思いが、私たちの内側にじわっと感じられることが大概かなあと思います。

もちろん、神は無から有をお造りになられるお方なので、初めのうち、または時には、聖書の言葉なしでも聖霊の御思いを感じさせて下さることがあるでしょうが、キリストを信じたならば、神の言葉そのものが、イエス様の言葉そのものが、聖書の言葉そのものが、聖霊の語り掛けであると聖書は語ります。

事実、今日の御言葉を通して、私たちは今、聖霊の語り掛けの中におります。

「無慈悲、憤り、怒り、怒号、ののしり、悪意を捨て、互いに親切にし、優しい心で赦し合いなさい。神も、キリストにおいてあなたがたを赦して下さったのです」という御言葉を通して、聖霊は今私たちにお語りになってくださっています。

「聖霊を悲しませてはいけません」という教えは、聖書の言葉に聞き、語り、守り、行うことを人生とした使徒パウロ先生の内に住んで下さった聖霊様の悲しみの思いが、使徒パウロの口を突いて出て来た言葉なんだと思います。

パウロ先生のみならず、イエス様もかつて、これに似たお言葉を口にされたことがありました。

マタイの福音書 1 2 : 3 1 に記されていますが、「人は、どんな冒瀆も許して頂け、わたしに逆らう言葉を口にしても赦されますが、聖霊に対する冒瀆や逆らう言葉は、この世でも次に来る世でも赦されません」と仰りながら、聖霊の語り掛け、聖霊の私たちの心やたましいにお与え下さる思いに聞き、従い、行うことの重要性、聖霊様を大切にすることが、神の前であって私たちの永遠の生死を分けることだと教えて下さいました。

## Part Two

そして今日の聖書箇所、聖霊様が何を悲しまれておられるのか、聖霊様の私たちへのその語り掛けの内容は、私たち人間同士の関係に関することであると教えて下さいます。

実際に、人間同士の関係は、私たち人を生かしますし、殺しますし、

肉体的な生死のみならず、精神的に生かしたり殺したりもしますし、キリストの恵みに沿った人間関係は人を霊的に生かしますが、キリストの恵みに沿わない人間関係は、人を霊的な死に追いやることがあります。

だから、「互いにからだの一部分として真実を語らないことや、人に対して憤ったままにいることや、盗むことや、ことばをもって人を苦しめたり、害したり、無慈悲であったり、怒号や罵ったり、互いに親切にせず、赦し合わないことは、聖霊なる神様を悲しませることであり、聖霊のその悲しみが聞こえますか？ その悲しみがあなたの悲しみでもありますか？」と、今日の聖書箇所は語り掛けてきます。

聖霊なる神様の悲しみが、私の悲しみのように感じられる思えることほど、イエス・キリストを信じるクリスチャンとして、この世の人間関係を生きる時に重要なことはないでしょう。

「聖霊を悲しませてはいけません」という言葉は、人と人との関係に関してのみならず、「あなたと聖霊なる神様の関係は、どんな関係ですか？」ということも、同時に問うてきます。

人と人との関係において、私たちがどれほどに聖霊の悲しみだったり、喜びだったりを認識し、覚えることが出来ているだろうか。

もし、「他者との関係はすべて私の意思や決定であり、そこに神様の入る余地はない。私の信仰は、私と神との関係という個人的宗教心の成就が全てである」というならば、それは、キリストを信じる信仰ではなく、または、「聖霊を悲しませてはいけません」という御言葉の実践でもないということになります。

聖霊なる神様は、「人と人との関係が壊れること、千切れること、いがみ合うこと、裁き合うことを悲しまれる」と言います。

つまり、私と他者との関係において、どれほどに聖霊の悲しみだったり、喜びだったりを意識しながら反映させることが出来ているのかが信仰であり、キリストにあって霊と心が新しくされ続ける新しい人を着ているのか、着ていないのかを決めることになるということです。

### Part Three

他の誰でもない、聖霊なる神様を悲しませてしまうこと。

サタンや悪魔は、神を悲しませることが仕事であり、生業であり、ビジネスでありますから、人と人との関係を引きちぎろうと、吠えたける獅子のように誰かを食い尽くそうと探し回りながら、私たちのからだの中で戦う欲望を煽ってきます。

そして、その煽りは、大概、私たちの中にある正義感という厄介なものに結託するようになっており、「私は正しいんだ！間違っているのはあの人だ、

この人だ！」という思いに執着させ、こだわらせ、自らを包んでしまうようになります。

皆さんには、人との関係において、「聖霊を悲しませてしまった。聖霊が悲しんでおられることを感じてはいるけれども、その悲しみを無視し続け、自分の正しさにこだわり続けた」というご経験がお有りでしょうか。

または、今まさに、そういうところに置かれているでしょうか。

以前も一度、メッセージの中でお話ししたことがあります。私にとって忘れることの出来ない、人間関係における聖霊の悲しみを感しながらも、それを無視し続け、「あいつが先に連絡をよこしたら、赦してやろう。あいつが先に謝ったら、赦してやろう。僕はいつでも赦す準備が出来ているし、間違っているのはあの人の方だから、先に電話をくれるなり、訪ねて来てくれたらそれでいいんだ」と思い続けていたことがありました。

今からちょうど9年前になるとおもいますが、土浦めぐみ教会の青年主事の働きを辞し、神学校での学びのために、家族6人でアメリカに行く準備を進めていた時のことでした。

家族6人でアメリカに行かなければならなくなった時、一番怖くて、夜も眠れない程に心配したのが経済的な事でした。

どんなにかき集めても、1年ちょっとで底を突いてしまうぐらいの経済力しかない状態で、子供たち4人を連れて家族6人でアメリカに行かなければならない状況の中、一本の電話がありました。

めぐみ教会の駐車場でその電話に出たのですが、アメリカロスアンジェルスに住んでいる30歳年上の従弟からの電話でした。

30歳も年上なので、私が大学生の頃アメリカに1年間短期留学した時、父親のように面倒を見て下さり、またその娘さんは私にとって従姪にあたりますが、1歳年下のその姪っ子を通して初めて教会に行くようになり、一緒にロシアやカザフスタンに短期宣教にまで行き、私がイエス様に会おうきっかけを作ってくれた恩人家族であり、私にとってアメリカにいる唯一の親族でした。

で、その従弟の兄さんからアメリカに発つ1か月ほど前に、突然電話がありました。

そしていきなり、「おい、豊和！ お前、家族6人でアメリカに留学に来るそうだな！ お金はあるのか？ 家族4人でロスアンジェルスで暮らしていくために必要な額をおまえは知っているのか？ ましてや6人での留學生活なんて無謀だぞ！ アメリカに来てからの働き口はあるのか？ もし無いなら、来るな！ 俺やうちの子どもたちを当てにしてくれるな！」というようなことを言われたように感じました。

今となっては、私たち家族を心配しての言葉だったと思うのですが、その時

の私には、私に対する暴言としか聞こえませんでした。

その電話があるまで、従弟家族が負担に思うかもしれないからと、私から従弟にアメリカに行くなんてことは一度も電話などかけて話したこともなければ、知らせたこともないのに、突然の国際電話に腹が立って「おい、ふざけんな！ あんた何様のつもりだ！ あんたなんか家族でもないし、金輪際連絡なんかしてくれな！」と言い放って電話を切りました。

怒りが収まらないので、妻に電話し、実家の母にも電話して、その従兄の悪口を並べ立てました。

そして、その従弟の電話番号や住所が分かるものはすべて消し、処分して、私からは一切連絡出来ないようにしてアメリカに行きました。

その時からずっと心に何か詰まったような、つかえが取れないような感覚を覚えるようになりました。

「奴が悪いんだから、奴から僕の連絡先なり、住所なりを調べて、僕のところに先に謝りに来たら、会ってやる」というような思いがずっとありました。

それから2年半、従弟は私の連絡先も知らなければ居場所も知らないで、当然連絡も無ければ、私の方から会いに行ったり、連絡をしたりすることもありませんでした。

だからと言って、心が平穏かというとは全くそんなことはなく、私の人生において最も大事なイエス様との出会いを提供してくれたその家族との関係を断絶している状態が、悲しいと言いましょうか、苦しいと言いましょうか、何をしても頭から離れなくことがありませんでした。

今日の御言葉に照らし合わせますと、正に、聖霊の悲しみの声を無視し続けていたような状態にありました。

その2年半の間、心の内にうるさい程に響く声のようなものがありました。

「おい、豊和。本当にそれでいいのか？ あなただって、怒りにかまけて感情をぶつけて、30歳も年の離れたお父さんのような存在に、あんな失礼な言葉ぶつけておいて、あなたにも非があつたでしょう？

イエス様信じているんだよね？ 神さまもイエス様にあつて、あなたを赦してくださっているでしょ？ イエス様によって父なる神様と和解させて頂いたんでしょ？ で、あなた牧師でしょ？

何よりも、あなた！ あなたの論文のテーマが“和解”じゃないの？

和解しなくちゃいけない人がいるのに、和解もしないで、和解について論文を書こうなんて、なんてふてぶてしいんだい！

よく、この声を聞こえないふりをしながら、和解についての本を読むことが出来るね？

わたしの悲しみが、あなたにも聞こえているでしょ」とずっと語り掛けられ、心が苦しくなつてついに降参しました。

降参して、インターネットで、ダメもとで、従弟の名前「Jason Hong」という名前を打って検索したところ、韓国からアメリカに移民してロスアンジェルス近郊に住んでいる方々の同窓会名簿というのが見つかったんです。

するとそこに、「Jason Hong」の情報が出てたんです。不動産業をやっていること、住んでいる住所、年齢、電話番号、メールアドレス等の情報が出来て来て、びっくりしました。

そこまで情報を得ることが出来たんですから、もう聖霊様の促しに従うほかありません。

祈りながら、意を決して、メールを送りました。

「ジェyson兄さん、お元気でしょうか？ 私たち家族は、アメリカに来て2年半が経ち、フラー神学校の家族寮で元気に暮らしています。2年半前の私の無礼をお許してください。またその間、連絡もせずになっていたこともごめんなさい。もし許してくださるならば、一度、ご挨拶に伺ってもよろしいでしょうか」というようなメールをドキドキしながら送ったところ、「豊和。メールをくれてありがとう。私の方こそ、申し訳なかった。今度一度、お前たち家族と私たち家族全員で会おう」という返信が届きました。

そして、ついに会う日がやって来ました。

ドキドキしながら自宅に伺ったところ、兄さんご夫妻、その息子家族も、娘家族も、みんなとても喜んでくれて、20年ぶりに会い、涙を流しながら抱き合い、みんなで祈りました。

私たちが帰る時には、用意して下さっていた段ボールいっぱいの果物と食べ物と子供たちのお土産を下さり、「あ、本当に僕に対して申し訳ないと思っていてくださったんだ」という気持ちをほっこりと感じました。

それから、アメリカを発つまでの半年間ちよくちよく会うようになり、私たちが日本に帰ってくる時には、従姪（従弟の娘）のジェイン家族にロスアンジェルス国際空港まで車で送ってもらいました。

『無慈悲、憤り、怒り、ののしり、悪意を捨て去り、互いに親切にし、優しい心で赦し合うこと、神も、キリストにあってあなたを赦してくださったのです』という聖霊の促しに降参して、従った先にあるこんな素晴らしい共に分かち合う聖霊の喜びと、こんな素晴らしい愛ある関係になるんだったら、もっと早く連絡を取って、和解しておけば良かった」と、本当に後悔しました。

こんな結末を迎えるとは露程も知らず、何でその間連絡できなかったかと言いますと、「どうしても納得が行かないし、僕よりもあっちの方が悪いし、あっちから先に謝ってくれるなら、まあ赦してやってもいいけど」と思っていたからです。

そして、何よりも、「何でこんなことが、僕に降りかかるんだ！」という自分の人生、自分の置かれた状況、自分という人、そして、そんな心の苦しみを

抱くようなところへと導いた神様が腹立たしく思えて仕方がなかったからです。  
まあ神様にしてみれば、とんだとぼっちりでしょうが、私にしてみれば、  
「何なんだよ！」という思いでした。

### Conclusion

そんな思いを抱きながら、どれだけ聖霊様を悲しませてきたことか。  
どれだけ聖霊様を悲しませていることか。  
これからも、聖霊様を悲しませずにはいられない者であるのかを、私自身、  
告白するしかないことを告白するしかございません。

聖霊に喜んで頂けることをするというよりも、取るに足りないけれども、幼い子どもが描いた小さな拙い絵を宝物のように、いつまでも大切にしている親のように、または、成功したとか、完成したとかというのとは程遠い小さな小さな一歩、行いかもしれないけれども、その勇気や心掛けを目を細めながら喜んで見守っている親のように、聖霊様が喜んでいて下さるといふ恵みに生かされていると告白するしかなく、そのように感じながらクリスチャンを生きている、生かされていると告白するしかございません。

なおも怒りますし、なおも偽りますし、なおも赦せていないことがありますし、親切の代わりに無慈悲を働き、親切さどころか冷たさを感じさせてしまっている方々も少なくないと思いますし、聞く人に恵みを与えることばよりも、悪いことばで人をののしってしまうこともありますし、神がキリストにあつて赦して下さっているという最も大事な事実よりも、「私に赦す権利があり、私が赦している」と、いつの間にか、自分が神の座に着いていることをしょっちゅうだと思えます。

そのようにして、神の聖霊を悲しませてしまったこと、数知れずです。

でも、それでも、イエス様の放蕩息子の例え話に出て来る放蕩息子が、父の前にボロボロになっても帰って来て、喜んでくれる父を見て喜んでるように、聖霊なる神様に喜んで頂きたいと思っております。

「神の聖霊を悲しませてはいけません」という、三位一体なる神様の深く、高く、広く、長い、微かだけれども鮮明な語り掛けに聞き、守り、従うことを今一度思い巡らしながら、聖霊について行きたいと願います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 4：30